

<論文>Ali ad-Dimisqi の商業書：とくに商品学的部分について

著者	風巻 義孝
著者別名	Kazamaki Yoshitaka
雑誌名	経営論集
巻	1
ページ	21-44
発行年	1975-06-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00005921/

Alī ad-Dimišqī の商業書

——とくに商品学的部分について——

風 卷 義 孝

最古の商業書

商業学の入門書『商業学を学ぶ』のなかで，“商業学の起源と発達”の¹⁾コラムを執筆された福田敬太郎氏もふれておられるように，商人が自分の経験を覚書にして，直接後継者に指針として与えたものから始まった商業に関する体系的な著作のなかで，「世界最古の商業学的文献として伝えられ」ているものは，「Alī ad-Dimišqī の『商業の美——善良な商品と粗悪な商品との弁識ならびに商品詐欺師の偽造に関する指針』という手記」であるという事実は，商業学の世界ではかなり広く知られている。Alī ad-Dimišqī の，この先駆的な著作の存在ならびにその内容の片鱗が，ドイツの簿記・会計史の研究者として著名なペンドルフ Penndorf (1873～1941) によって，商学・経営学の分野に初めて紹介されてから，²⁾ちょうど，半世紀たち，増地庸治郎氏をは³⁾じめ，池内信行，佐々木吉郎といった方々によってそれがわが国につたえられてからも久しい。平井泰太郎氏が，『経営学文献解説』において，「世界に於て，何が商業又は計算に関する最初の文献であるかは説が分かれて居る。人に依ってはエジプト乃至はバビロニア，アッシリア以来の金石を探り，又はギリシヤ，ローマの古文書を尋ね，或はフィレンツェの商人 Pegolotti F. B. 以来の数々の私家の手記或は Manuscript の類に遡る。しかしながら学者は，Al-Dimiski: *Das Buch des Hinweises auf die Schönheiten des Handels*……（以下略）より論を進める事が多い」⁶⁾とその独訳のフルタイトルを掲げておられるように，商業学なり経営学の広範かつ系統的な文献史的研究の領域でも，それは世界に現存する最古の商業書とみなされてきた。

このような認識は，今日のアカデミズムにおいてもひきつがれ，最近刊の体系的学術書，久保村隆祐，荒川祐吉両氏編『商業学——現代流通の理論と政策——』においても，“商業および流通研究の史的展開”の冒頭で「商業・

流通の研究は商業の歴史とともに古いと考えてよい。この意味では、われわれはすでに古代シュメール文化においてB.C. 2000年の昔に大規模な商業活動があったことを知っており、従って商業・流通研究もそこまで遡り得ると考えられる。」としながらも、ただちに引続いて、「しかし、今日実際に残されている最古の商業文献は9～10世紀ごろアラビア人ディミスキ (Ali ad-Dimišqi) によって書かれた『商業の美、良き商品と悪しき商品の知識なら⁷⁾びに商品詐欺師の偽造に関する指針』という書物であるといわれている。」とし、14～15世紀頃イタリアで続出した商業なり流通の端緒的研究の系譜に属するものとの位置づけが与えられている。この著作が、「実務上の経験的知識の集成」にとどまるものであったか、またはそれを超えるものであったかの評価は別としても、それが商業にかかわる単なる断片的な記載の域を超えた、現在までに確認されている世界で最も古い単行の商業書であることは間違いなからう。

Ali ad-Dimišqi の著作といわれる、このアラビアの商業書の主要な内容の一つが、商品に関する記述であって、それが商品学の先駆的な文献であることをわが国の商品学界で初めて指摘したのは、柳川昇氏であった。商品学を、重商主義時代の古典的な商業学、即ち、体系的商取引学とのかかわりで論じた論文、“商品学の発達——特にその所謂古典時代を中心として——”のなかで、「商品に関する叙述は時間的に遙かに遡って見ることができる」と、氏は述べて「ペンドルフによれば最古の商業学に関する著書は9世紀より12世紀に至るアラビアの商業繁栄時代に著わされたる Ali ad-Dimišgi : *Das Buch des Hinweises auf die Schönheiten des Handels und die Kenntniss der guten und schlechten Waren und die Fälschungen der Betrüger an ihnen* であり、本書はその書名の示す如く商品に関する凡ゆる偽贋行為の鑑別⁸⁾なる実用目的に照応したる商品の叙述を以てその第一部となしたと云われ⁹⁾」と紹介している。

この本が、商品研究の歴史なり商品学の生成、発展の歴史をあとづけるにあたっ¹⁰⁾ての数少い貴重な文献の一つであり、その表題から推しただけでも、極めて示唆に富む内容が期待されることは、最近も、星宮啓、G. Grundke 等、内外の商品学者のなかに、Ali ad-Dimišqi の名と著書のフルタイトルをあげている著作があることから十分にかがうことはできる。しかしな

がら、経営学、商業学、商品学の各分野からふれているこれらの文献は、その典拠が一つと思われるにもかかわらず、著者名の表記や、著作年代がまちまちであり、タイトルの表現にも若干適正を欠くものもあり、その構成や内容にまでたちいってふれている部分は、最近 Leitherer¹¹⁾ の論著を紹介した岡下敏氏¹²⁾ の論文が、他より少々詳しいとはいえ、その数が少ないばかりか一般に簡略なものにとどまっている。

文 献

Ali ad-Dimišqī の商業書の存在を指摘し、その内容を紹介する典拠となってきた Penndorf や最近さらにやや詳しくつたえている Leitherer の論文は、いずれも、Hellmut Ritter の論文、*Ein arabisches Handbuch der Handelswissenschaft* (1917)¹³⁾ をよりどころとしている。この論文は、91ページにわたる長さをもち、Ali ad-Dimišqī の商業書の紹介ならびに、書誌学的な解説とともに、その内容の大部分を翻訳したものである。しかしながら、彼の紹介に先立って Eilhard Wiedemann¹⁴⁾ の手によってこの商業書の一部、主としていわゆる Warenkunde の部分が *Beiträge zur Geschichte der Naturwissenschaften* に寄稿されているため、リッターの論文では、重複をさけて、この部分の翻訳は欠落しており、取扱われている商品名を列挙する程度の簡単な説明にとどまっている。

したがって、Ali ad-Dimišqī の商業書の全容をとらえようとするためには、Ritter の論文だけでは不十分であって、Wiedemann の紹介と併せて検討することが要請され、とくに、商品学の部分の内容をしるためには、後者の文献は不可欠なものと言わざるをえない。

筆者は、さきに、Ritter の論文のコピーは入手してあったが、このたび、幸いにして、Wiedemann の論著をも手にする機会に恵まれたので、本書の全貌の紹介は他日にゆずるとしても、商品学ないしはそれと関連の深い前半の部分だけでもとりあえず紹介して、筆者がこれまでとりくんできた分野である商品学の文献史的研究の進展のための素材として提供しよう。

著者 Ali ad-Dimišqī

この本の著者の名は、主として Ritter—Penndorf 経由でつたえられてお

りながら、Ali ad-Dimišqī という表示のほかに Al-Dimisquī (Penndorf, 佐々木) や Ali ad-Dimišgī (柳川) といった表示もつかわれている。後者が、¹⁵⁾ いかなる文献に依拠しているかは、詳かではないが、他に、英語の文献で、Al-Dimashqī と表示したものを含めて、そのもとになったアラビア語は同一のものであっても、基本的にはヨーロッパ系の文字におきかえ翻字するにあたっての表示方法に差が出たものと解してよからう。

Ritter の表示によれば、著者の名は、尊称を含めて、Scheih abū l-Faḍl Ga'far b. 'Alī ad-Dimišqī¹⁶⁾ としるされており、Wiedemann によれば、それは、Scheich を別掲したうゑ、Abu'l Faḍl Ga'far Ibn 'Alī al Dimaschqī¹⁷⁾ と書かれている。

Scheih または Scheich とは、家長、族長の尊称、abū l……b, Abu'l... Ibn とは、父、誰々の息子といういわゆる父称であり、Faḍl とは優れたという意味の敬称であるから、これらを省略すれば、この部分は、父、ガファールの息子ということになる。Ali ad-Dimišqī という表示と Ali al-Dimaschqī という綴りとでは、一見かなり違うようにも思われるが、ad と、いわばリエゾンするところであるから、いずれの表示でもよいことになる。Dimišqī, または Dimashqī と表示されているのは、yaban 日本に対する yabani 日本の、日本人という意味の場合と同様、ダマスクの、ダマスク人の意味であるから、フルネームを、尊称、敬称をぬかして単純化すれば、父、ガファールの息子、ダマスクのアリーということになる。レオナルド・ダ・ヴィンチは、ヴィンチ村のレオナルドであり、中浜万次郎は、土佐中浜の万次郎であるように、ダマスクのアリーは、アリーと名だけと呼ぶことはまだしも、ダマスクの人という意味にあたる、例えばディミスキという呼名だけで、あたかもその姓の如く呼ぶことは好ましくない。

Ali ad-Dimišqī ダマスクのアリーと呼ばれるこの本の著者について、彼がどのような人物であったかは全く知られていないし、この本が書かれた時期についても正確なところはわからない。福田敬太郎氏は、「当時、貿易活動で巨富を積むことができたアル・ディミスキと呼ばれる人¹⁸⁾」と、述べておられるが、これとてあくまでも推定にすぎず、文献による裏付けはされていない。

現存しているこの本は、カイロの、ヘディベ Khedive (副王) 文庫の所蔵

本であって、1318年に出版されたものが残っている。¹⁹⁾その序文の記載事項から、二つのダマスクの手稿を合併し、改訂したものであることが推定されているが、オリジナルな労作に関するそれ以上の手懸りはない模様である。この本の、いわばオリジナル版ともいふべき二つの手稿が、執筆、出版された時期ないしは著者が活躍していたであろう時期に関し、10世紀(福田) 9～10世紀(荒川)、10～13世紀(佐々木)などの説明もみかけられるが、Al-Kindīをはじめとする本書の引用文献の著者の生存年代や、記載内容にでてくるインドの貨幣の鑄造年代、等から推定されたところによれば、著者は、ほぼ回教暦で250～570年、西暦では、9世紀から12世紀の間に生存した人物ではないかといわれている。²⁰⁾この時期は、まさにアラビア商業の繁栄時代にあたるが、引例などから推して、おそらくは東西交通の十字路の位置にあたり、海路・陸路の接点にもあたっていて、当時、アラビアにおける商業の中心的な位置にあった今日のシリア地方、なかんずく、その中心地であった、特にダマスク²¹⁾において、この本は著述されたものと推定されている。

書名——商業の美……——

ダマスクのアリー、Ali ad-Dimišqī の著作といわれるこのアラビアの商業書 <Ritter は商業学の手引書と呼び、Wiedemann は、商業・商品学書と呼んでいる>²²⁾のフルタイトルは、次のようなものである。

Kitāb al-išāra ilā mahāsin at-tigāra wa ma'rifat ġajjid al-a'rad wa radi'iha wa ġušūš al-mudallisīn fihā.

このタイトルを、Ritter は、前述の如く、*Das Buch des Hinweises auf die Schönheiten des Handels und die Kenntnis der guten und schlechten Waren und die Fälschungen der Betrüger an ihnen*²³⁾と訳しており、他方、Wiedemann は、*Werk des Hinweises auf die Vorzüge des Handels und der Kenntnis der besten und schlechten Qualitäten der Waren, sowie die Nachahmungen der Fälscher*²⁴⁾と訳出している。わが国では、mahāsin at-tigāra の部分を訳出したところの Schönheiten des Handels「商業の美」という部分を探り、

いわばメインタイトル，あるいは略称で呼ばれている場合がある。ところで，mahāsin という語は，hāsan よい，きれいな，という意味の言葉から派生したもので，美点，長所といった意味のほかに功績，効果といった意味も含まれているので，より一般的概念としては商業の貢献なり役割といったところとなろう。また，ma‘rifat という語も，知るところのものであれば知識であり，知るところのことであれば認識なり識別という意味となり，いずれを採るかは微妙なところであろう。さらに，冒頭の Kitāb al-išāra が des Hinweisesとドイツ語訳されたためか，偽造に関する指針との和訳がみられるが，偽造のための手引書と逆にうけとられることはよもやないとはいえ，誤解をうけかねない表現をとることはなるべく避けた方がよからうと思われる。

このような点を検討し，かつ，本の内容とも照応させたところでは，この本のタイトルは，さしずめ，「商業の役割，商品の優劣の識別，ならびに詐欺者によるその偽造に論及した本」といったところがおおむね妥当な表現となろう。

項目の配列

この本は，全体で72ページから成り立っていた模様で，Ritter と Wiedemann 両者の訳出や紹介を総合すると，ほぼ次のような内容構成となっている。Ritter の論文には，原著の章や節の表題と思われるものが訳出されているが，どれが章にあたり，どれが節にあたるものかが，その表示形式からだけでは判別し難いので，項目の順序のみに従ってこれを配列することにした。また，これらの表題の大部分は，ドイツ語訳からの再訳であるが，アラビア語の原語が翻字で紹介されていて，直接，より適切な訳語が見出せるものや本文内容との関連で直訳をとらない方が妥当なものにおいては，それぞれそのような方法をとってみた。なお<>内は内容から判断して筆者が挿入した注記である。

《財》の実体について

多くの財貨による富の称賛

なぜ《もの云わぬ》財貨<貨幣>が必要か

いかにして ≪もの云わぬ≫ 財貨<貨幣=貴金属>を検査し、その良し悪しを識別するか

商品について

あらゆる商品に関する標準価格の認識

商品の品質の良し悪しについて

宝石—芳香—香料—繊維—金属—食料その他—不動産—生存物

資産入手の方法について

強権による取得について

熟達した手段の（技術的な）さまざまな方法による取得について

強権と熟達との結合による取得について

職業について

商人に対する必要な忠告——崇高にして全能なる神のおゆるしをもって—

商業のすばらしさ

商人の第一の様式，蔵持商人（集散地商人）について

第二の旅商はいかに振舞うべきか

第三の船持商（輸出商人）はいかに振舞うべきか

商人の欲望に思惑をかける人々をいかに用心すべきか

愛想のよい詐欺者をいかに用心せねばならぬか

やま師やかたりをいかに用心せねばならぬか

信心ぶって俗世の幸福をえようとする偽善者をいかに用心せねばならぬか

資産の保全

資産の支出の際に何に用心せねばならぬか

その際，どう支出するかについての注意

資産の保護に必要なこと

資産のぞんざいな扱いや浪費の防止

これらの見出しからうかがえる本書の内容を，²⁵⁾Ritter を典拠にして Penn-
dorf²⁶⁾ や Leitherer²⁷⁾ は，商品学的な部分をはじめとして四分しているが，経済理論的部分が商品学的部分や商業学的部分と一部，重複していたり，商品学的部分をはさんで，前後に二分されていて，貨幣の成立など商品総論に先立つ部分は明らかに経済理論的部分とみなす方が妥当であることなどから，

このような四分には若干無理があるように思われる。そこで、項目の配列の順序を尊重しつつ、かつ、論理の展開と内容上の関連に力点をおいて、やや細分してグループ化を試みると、ほぼ次のような内容の配列となろう。

	頁
1 財	2
2 貨幣	4
3 商品総論	9
4 商品各論	13
5 財産の取得方法	39
6 商業の役割と方法	43
7 投機に関する警告	53
8 資産の保全	56

この本が、前にもふれたように、二つの手稿を合わせたものとするならば、その項目や内容から推し測ると、恐らくは、財—貨幣—商品総論—商品各論までの第一部と、財産の取得方法—商業の役割と方法—投機に関する警告—資産の保全までの第二部とから成り立っているとみるのがおおむね妥当であろう。そして、前編にあたる第一部は、まさに商品学的部分であり、後編の第二部は、いわば商業学的部分であると云えよう。Ritterをはじめ、これまでの紹介者が採っている四部分のうち、経済理論的部分や、忠告的部分と云われているものは、他の二つの部分、即ち、商品学的部分と商業学的部分ときりはなして、それらと併存する性格のものではなく、むしろ、経済理論的な方法なり、忠告的な方法が、商品学や商業学的な部分の内容として盛り込まれているとみなすことの方が、適当ではなかろうか。

＜なお、“財産の取得方法”までを第一部と解することも、十分に推定しうる。＞

筆者は、このように、この本の内容構成を大きく二分して、商品学的部分である第一部と商業学的部分の第二部とから成り立っていると考える。もっとも、商品学を広義の商業学のなかに含めれば、Ritterの論文のタイトルのように ein arabisches Handbuch der Handelswissenschaft となるわけだが、他方、商品学的部分の相対的な独自性を強調する立場に立つ筆者の側

にくみする考え方は Wiedemann のみだしのよう arabische Handels- und Warenlehre という表現の中に、見出すことができるとも云えよう。ともあれ、本書は、中世アラビアの商品学なり商業学の、内容なり水準を知るための貴重な文献であることは間違いないことであり、出来うべくんばいずれば、その全容が詳しく紹介されるべきものであろう。しかし、Ritter や Wiedemann の論著それ自体が、アラビア学なりイスラム学の幅広い文献学を土台にしたものであって、この分野の文献との接触にもとぼしく、非力な筆者にとっては、これをわずかな歳月で消化することは、到底不可能であるばかりか、仮にこのような背景とは、一応きりはなして、その内容を論ずるにしても、商業学の歴史なり、経済思想の歴史のなかで論旨を正確にはあくしていくことでさえ、時日の余裕が必要なので、今回は、全体の概要には、一応ふれてはおくが、まず主として、筆者の継続的な研究領域である、第一部、商品学の部分に重点を置いて紹介することにしたい。

財産の実体

この本の冒頭で、原著者は、まず māl (Besitz) [財, 財産] という語と、その実体 (haqiqat al-māl) にふれている。彼の分類によると、財は4つの類型に分けられる。

1. māl as-ṣāmīt (Der “Stumme” Besitz) [物云わぬ財=貨幣] これは、金、銀、ならびに、すべての鑄貨である。

2. ‘ard (Die Ware) [動産=商品 (狭義)] それ自体、使用対象なり販売対象となるもの。宝石、鉄、銅、鉛、木材など、その他これらからの製品。

3. ‘qār (Der Grundbesitz) [不動産] 更に細分され musaqqaf (überdachter Grundbesitz) [家屋類] として、家、旅館、露店、浴場、製粉場、印刷所、製陶工場、パン焼かまど、皮なめし工場、宮廷など、と muzdara (wirtschafts land) [農場類] として、畑、ぶどう園、牧場、林、泉や水利権をともなう池、などに分けられる。

4. hajawān (Die lebenden Wesen) [生存物] 金、銀を Stumme Besitz と表現するのに対応して、“redenden” Besitz 物を云う財、とベドゥイン人は名づけている。これを三つに分け、a. raqīq (Sklaven) 奴隷 (男、女) と、b. kurā‘ (Arbeitsvieh) 役用家畜 (馬、ろば、役用らくだ)、c. māšija (Weide-

vieh) 牧用家畜 (羊, 牛, 山羊, 水牛ならびに放牧され役用に使用されないらくだ) と例をあげている。

財の概念と分類などについては、アリストテレスをはじめ、さまざまな説がとなえられているところであって、経済思想史のうえでの位置づけを論じる紙幅はないが、この項で、筆者が最も注目したいのは、金、銀その他の鑄貨を、māl aṣ-ṣāmit (物云わぬ財) と呼ぶことである。原著書自身、後に、物云わぬ財はなぜ必要か、と貨幣の生成過程とその機能を説明しているが、ṣimt (沈黙) とは、まさに、使用を直接目的とした財貨ではなく、貨幣として、その使用価値から独立した状態にあるこれらの財貨を象徴する表現としてまことにふさわしいものであり、貨幣の本質に対する洞察の深さを示す言葉であるといえよう。

さらに、同様に、狭義の商品をさす言葉 'ard (Ware), a'rād (Waren) が、a+rāda (歩きまわるの意) から成り立っていて、本来、動くもの=動産を意味する言葉であるのに対し、a'qar が qā'd (坐る) からきた言葉で、まさに grundbesitz (不動産) にふさわしい表現をとっており、論理がロゴス λογος 言葉を原義としているように、極めて、率直でかつ象徴的な言葉で概念規定をしていることにも、驚嘆させられる。

富の称揚

次いで、注目したいことは、豊かな財産を所有することを称揚し、「富は²⁹⁻¹⁾好ましい資質と気高い天性のあらわれである。」として、それを賛えていることである。また「ある人の富がたとえ相続されたものであっても、それは、昔からの裕福で気高い家柄を示すものであり、また、もし、彼自身がこれを取得した場合には、彼のけだかい努力と、豊かな知性と、完全無欠な洞察力²⁹⁻²⁾を示すものである。」とも述べている。これらの言葉を通じて、当時、経済的な実力では、まさに世界に冠たる地位にあったアラビア商人の心意気が如何にさかんなものであったかがうかがえよう。また楽天的とさえ思われるようなその富に対する賛美は、古今東西の財富観のなかでも、ひときわユニークなものであり、ギリシア・ローマ時代には、往々にして精神的、肉体的なものの下位におかれていた物質財、即ち富たるものに対して、その倫理的なきずなを解き放って正当な地位を与えたものであって、アラビア経済思潮のお

おらかさを示したものとして注目されよう。

貨幣について

なぜ“もの云わぬ財貨”が必要かとの見出しで貨幣の必要性を説いた部分は、Ritterをはじめ、Penndorf や Leitherer などによって、これまで経済理論的な成果として高い評価をえてきたところであるが、そこでは、まさしく評判³⁰⁾どおりの説得力のある、大要次のような順序だてた論理が展開されている。

即ち、著者は、あらゆる生物にとって——はさておき、まず人間にとって、その属性によってさまざまに分けられる厖大な数におよぶ需要が存在することから説きはじめ、そのなかで、一方において、いわば衣食住のたぐいのように必然的な (tabī'ija, darūrija) 需要があるととも、他方、戦闘のための防具や武器、病気の際の薬剤や水薬のような臨時的で、流動的な (wad'ija, 'aradija) 需要も含まれることにふれている。

次いで、このような物を仕上げるまでには、一連のさまざまな技能を必要とするものであって、作物の栽培の際は、播種や植付け、除草、灌水、間引、……最後に、刈入れや採集と云ったことをせねばならぬが、完全な利用に至るまでには、更に、はるかに多くの技能が必要であると述べている。そして、穀物の場合は、収穫のあとにおいてもなお、脱穀し、箕で吹分け、篩にかけ、精製し、粉にひき、こし、こね、パンに焼上げられてはじめて最終的に食品として役立つのである。亜麻の場合も同様に、水に浸して柔らかくしたあと、なお、乱れた束を振り分け、砕き、麻こきでくしけずり、紡ぎ、練り、それから織物に必要な作業にとりかからねばならぬし、そのうえ色ぬきをし、さらし、縫合されて、衣料に役立てられる。このように、沢山の工程があることを例示したうえ、個々の人びとがこれらの技能のすべてにとりくみ、最初から最後まで熟達するということは到底不可能であるとし、具体的な例をあげてさまざまな職種³¹⁾の成立と相互依存からなる分業と協業との関係を説明している。

ところで、人びとはこのような依存関係にはあるが相互の需要は、一方と他方とが必ずしも時間的に一緒に満たされるとは限らないし、量的にもまた両者が同じ大きさであるとは限らない。次に、人は、さまざまな種類にわたった個々の事物の価値がいかなるものであるか、また、他のそれぞれの物の

任意の部分と、ある商品がいかなる量的関係にあるか、更に、任意の手仕事の出来ばえが、他の手仕事のそれといかなる価値関係にあるかを知らない。そこで、人びとは、それぞれの事物に対して価格を設定し、それによってそれらの価値の差を知りうるという物体の必要に気付く。その結果、今、何かある物を販売対象として、あるいは使用対象として必要とするときには、誰でも、計測手段としてあらゆる物にあてはまる物質でその価値をはかることができるようになる。もし、このようなものがないならば、誰でもが交換の相手の必要とするある種のものを、油なり穀物なりを所持してなければならないことになり、AとBとの相互に必要な物を、同時に手元に持合せているということはなかなか起り難いものであり、しかも、AとBとの価値が、正確に合致するというような都合のよいことは、そう起るものではないから、交換取引は成立し難い、と述べ、貨幣の成立の論理的な過程と、その交換手段、支払手段そして価値測定手段としての機能について解説している。

このような物云わぬ財＝貨幣の重要性について認識して以来、先人たちは、他の事物に価格を設定しうるような物体を捜し求めた。植物や動物などの生物が考えられたこともあったが、それらは、耐久性がなく、損傷しやすいので棄却された。金属のなかから鑄造しやすく、堅い鉱物が選ばれたが、鉄、銅は、いずれも錆び易いという理由で、また鉛は黒く変色し、容易に軟らかくなり変形し易いということで棄却された。同様に銅は一方では緑青が付着するのを常とする故に棄却されてはいるが、他方、銅貨として鑄造され取引に使用されてもいる。しかし、金と銀とが、楽に鑄貨の形状に鑄造し、展延、融合、分割され、容易にそれぞれ思うままの形態にされる故を以て、他のどの金属よりも優れているという点で、全ての人びとの意見の一致をみている。さらに、それらは、美しい光沢を持ち、臭気や臭味による妨げもなく、地中に埋めても変化なく、図柄をつけたりそれを保持するに適し、変造、偽造を予防するための、しるしを永続的にとどめることができる。そこで、両者が貨幣に鑄造されて、あらゆる事物に対する支払手段となる。なかでも金は、美しい光沢とすぐれた緻密さを持ち、変質することなく、最も長期にわたって地中に埋蔵でき、かつ、度重なる熔融にも耐えることができる。そこで、金の一定の量を、銀の特定のなにがしかの量と同等の関係におき、両者ともが、あらゆる事物に対する支払手段となる。このような関係について理

解することによって、各人は、それぞれの希望するときに、必要なものを購入することができるようになる。

彼は、このような論理展開で，māl aṣ-ṣāmit 物云わぬ財＝貨幣の成立について述べている。これが、貨幣論として、如何なる立場にたつものであるかを論じることが、本稿の目的でも筆者の任務でもないが、分業関係の成立から交換手段としての貨幣の機能を論じ、さらにその支払手段としての機能を経て価値の測定手段としての機能を論じ、一般的等価物＝貨幣材料としての金、銀の適性、なにかんづく金のもつ優越性について論を進めていく論理の展開は、使用価値から独立した貨幣なる「商品」を「物云わぬ財」と表現したアラビア民族の優れた抽象力に象徴されるように、優れて明快なものであって、その理論的な水準も、高く評価されるべきものに違いなからう。

商品の価格や品質などを知る必要について

商品の個別的な記述に先だち、著者は、商品総論とでも云うべき包括的ないしは前提的な記述として、先ず、諸商品 (a'rad) の取扱い、取引きにあ³¹⁾たつての留意事項として価格や品質を知る必要などを述べている。彼は、大別して三点に心を用いるべきであると云っている。その第一点は、商品の購入ないしは仕入にあたつての留意事項であって、それは、さらに二つの方法によって行なわれるとして、個別商品の標準 (平均) 価格の認識と、商品の品質の良し悪しならびに詐欺者がそれに手をつける偽造についての識別の必要性をとりあげている。第二点としては、「それぞれの技術については、信用しうる専門家の助力を要する」と予言者が云ったように、専門的な信頼しうる人々からの手助けを受け、その忠告を聞くべきことを述べている。そして、第三点としては、商品の損傷や変質、さらには各種の盗難の防止に留意すべきことにも触れている。

まず、標準価格について論じている点についてかいつまんで述べよう。先ずはじめに、その取引地点が問題となることが指摘されている。同一の商品でも一つの地方の中位の標準的な価格水準が、他の地方のそれとは異なるものであり、集散地からの遠近や、有名な特産地のものであるか否かなどによっても異なるものであるとして、そのもつ地域性についてインド産のやなぎご³²⁾おりや、真珠の場合を例に説明している。通常の変動の、また時には、損害

をこうむるほどの異常な上下の変動の基準として認定できる標準価格を、人は、故国における、その商品の過去の価格を手懸りとして、自分自身の熟練によって評価することができるが、それぞれの商品なりそれぞれの購入対象ごとに、専門家によって知られた特定の標準価格がある故、正確には、それらの信頼しうる専門家に問い合わせることもできようと述べている。そして、とくに注目すべきことに、「その際、その商品が安定した状態にあるのか、危険な状態にさらされているのか、またそれが豊富であるか欠乏している³³⁾のかといったことを常に考慮して推定の結論をみちびかなければならない。」と商品の供給面での安定性が基準となる価格の推定にとって重要な顧慮事項であることを指摘している。

次いで、著者は、価格の上昇や下降をあらわす若干の相場用語（例えば、hada'a si 'ruh [beruhig<Ruhe>] <心の平静—休息—いっぶく>といった）の、いわば、テクニカル・タームを紹介したあと、価格の変動の通例と、経験の豊かな商人が、つねづね「安値から高値になるとき買っても、逆に、高値から安値になるときは買うな」と云っているような、価格変動と売買の機会との³⁴⁾関係についても詳しい説明を行なっている。

商品の品質の良し悪しと、詐欺者が犯す偽造を識別し、とりわけ商品のそれぞれの種類ごとにそれを知るためには、数多くの方法がある。例えば、宝石について云えば、Al-Kindi (～873) をはじめとした先駆的な学者たちが一群の論著をあらわし、そのなかで、宝石の価格、称賛に価する性質、³⁵⁾原産地、採取方法等を取扱っている。また、芳香と薬香や香辛料についても同様である。古代の医者や哲学者や、数多くの近年の学者たちが、これらを対象とした労作を持っている。それらのなかには、それぞれの性質、用途、個々の品種の優劣、³⁶⁾産地、したがって、そのギリシア名、ペルシア名、アラビア名を記述している。このように、商品分野ごとに、これまでもかなりの文献があることを指摘したうえ、香料だけについてみても、近年は、まさに3,000もの薬種が数えあげられるほどであるから、それらの有用な、または有害な性質を述べるだけでも長ながとしたものとなり、織物や、道具類など、同様に沢山の種類のあるものについても、いちいち、その良否をたしかめる方法を提示するとなると、非常に龐大なものとなって本書の意図からはずれてしまうので、大量に売買され、取引される商品のみに限定して述べると、

各論へのことわりがなされているにとどまり、品質の良し悪しなり偽造を識別する方法についての具体的な記述は、各論の方にゆだねられている。

なお、‘標準価格の認識’、ならびに‘商品品質の良し悪し’を見出しとした節で、以上のような主旨の内容を詳述するに先立ち、留意事項の第三点については、‘商品について’という最初の総括的な節のなかで少々詳しく述べているので、これについて、若干ふれておこう。著者は商品の損傷や変質を防ぐためには、どのような物が、正しくは、商品のそれぞれの種類ごとに、量的にどのくらい損傷しやすいものなのか、その原因として背後に存在する事物は何か、また、どのような処置をしたらよいか、それが夏であるか冬であるかに従い、また旅行中か、家においてかに、さらに大量のものに適用するのか少量の場合であるのかに応じて知っていることが必要であると述べている。そして、塵や湿気——水の場合と露の場合があるが——や、寒さなどに対する商品保護の方法として床板を敷いたり羊皮で覆ったりする具体的な方法を述べ、とくに高価な商品については、一層注意深い処置として、一度、包装と紐締めがなされたうえに、棉屑をのせ、さらにそのうえによく練りあげたフェルトを置いて全体をしぼったうえ、なお、そのうえをワックスをぬった材料で覆い、全体をさらになめし皮でつつんで帯でしめると、その包装方法を詳しく記述している³⁷⁾。そして最後にこの種の配慮として、横領、窃盗、強盗に対する用心についてふれ、不誠実な人たちに対しては、封印と荷印とを用い、商品を数えて、その量、重さ、数を記号化して用いるならば、それらの形跡を調べることによって、かくされた状況を追跡して、そこへ導いていくことができると述べ、窃盗に対しては、堅い戸、よい錠前、高い壁によって、器用なものでも道がみいだせないような確かな場所に保管することであり、強盗に対しては、海送の場合は、確かな装備と、多くの武器や水夫などの乗組員たちをもった大きな装甲された船により、また、陸送の場合は、信頼しうる立派な案内者か、しっかりと監視し正しい知識を持った信用しうる随行者によって防ぐことができると述べている³⁸⁾。このように商品総論ともいべき部分で、価格と品質とを知る必要を提示するとともに、包装、荷印といった問題にもふれていることは、商品学の歴史のうえでも注目すべきことといえよう。

商品各論

H. Ritter が、「この本の最大の、そして最も重要な部分を形成し、そこに、彼、固有の著作上の特性をあらわしている³⁹⁾」と評価しているところの商品学的な記述は、商品の概念を最も狭義に解釈し、原著者が a'rad と呼んでいる部分の各論だけに限定しても、本書の、ほぼ三分の一を占めており、不動産や家畜をはじめとした生存物についての記述や、貨幣として流通している金、銀についての識別法などの記述をも含めれば、広義の商品各論的な記述が、全体のちょうど4割を占めている。既に述べたように、Ritterの論文においては、これらの部分の紹介なり論述は極めて簡単になされているにすぎず、とくに a'rad については取扱われている商品名だけは、ほぼその全貌をすることができるが、その記述内容となると、貨幣として別掲されている金、銀の記述から類推する以外はほとんど手懸りがないのに反し、Wiedemannの方は、宝石、香料の大部分、繊維、金属、食料のうちの代表的な商品については、その記述の全容を紹介している模様であるが、Ritter論文で名称だけはでていいるかなり沢山の商品、とくに二次的に加工された商品についての紹介が省略されているし、不動産や家畜などの生存物についての記載もみあたらない。したがって狭義の商品 a'rad に限定しても、その記述内容を網羅的に紹介することは、資料の制約からも不可能であるが、本稿の紙数のうえでも制約があるので、そこで取扱われている主要な商品名一項目一と、代表的な記述事例を紹介しながらその記述内容の特色について論述するにとどめたい。なお、金、銀は、貨幣 māl aṣ-ṣamit (もの云わぬ財) のところで取扱われているので、狭義の商品 a'rad、の項目のなかには入れられていない。

主として Ritter の文献に記載されている商品名をその翻字法に従って紹介すれば、次のとおりである。⁴⁰⁾ <ただし分類では、筆者の責任で香料を一括した。>

宝石

lu'lu' または durr (Perle) 真珠, jāqūt (Korund) 鋼玉, zumurrud (Smaragd) エメラルド, mās (Diamant) ダイヤモンド, firūzağ (Türkis) トルコ石, margān (Koralle) さんご, 'aqīq (Karneol) ルビー, lāzward (Lazurstein) るり, ġaz' (Onyx) しまめのう。

香料

[tib (Wohlgerüche) 芳香]

misk (Moschus) 麝香, 'anbar (Ambra) りゅうぜん香, kāfūr (Kampfer) 樟腦, 'ūd (Aloe) ろかい, qaranful (Gewürznelken) 丁字, sunbul (Narde) 甘松, sandal (Sandelholz) 白檀, za'farān (Safran) サフラン。

〔saqaṭ aṣ-ṣaḡīr (Kleinen Spezereien) 小薬香〕

rūwand (Rhabarber) 大黃。

〔saqaṭ al-kabīr (großen Spezereien) 大薬香〕

nīl (Indigo) 藍, baqqam (Sappanholz) 蘇方, fulful (Pfeffer) 胡椒, lubān (Weihrauch) 乳香, mastakī (Mastixgummi) マスチック・ゴム, dār sinī at-ta'ām (Speisezimt) 肉桂, āl (Togariholz) うこん, zāngābil (Ingwer) しょうが, zurunbād (Zitwerwurzel) 莪朮, hūlangān (Galgant) 良薑, quṣṭ (Kostwurz) ミルラ, ladān (Ladumun) 香木, ihlilig (Myrobalanum) 櫟の実。

繊維

kāḡid (Papier) 紙, kattān (Leinen) 麻, qutn (Baumwolle) 木綿, šūf (Wolle) 当毛, ṣu'ūr aṣ-šāt (Ziegenhaare) 山羊の毛, ibriṣam (Seide) 絹, dibāḡ (Atlas) 縐子, ḥazz (Chazz) ?, siqlātūn (Cyklaton) ?, 'attābī (Tabin) タビネット, muṣmat (einfarbiger Seidenstoff) 絹の単色生地, dabiḡī (Dabiḡistoff) ?, šarb (Scharb) ?, nasāfi (Nasafi) ?, abrād (Wollzenge) 毛製品, lubūd (Filze) フェルト, busuṭ, ṭanāfis (Teppiche) じゅうたん, manātīr (Regenmäntel) 雨衣, aṣilla (Unterpanzer) 内装衣。

金属

armāhen (Eisen) 鉄, fūlād (Stahl) 鋼, naḥas-ahmar (Kupfer) 銅, tūtiḡā (Messing) 真鍮, isbādrūh (Bronze) 青銅, raṣās (Blei) 鉛, qal'ī (Zinn) 錫, zibaḡ (Quecksilber) 水銀。

食料ならびに類似品

qamḥ (Weizen) 小麦, ša'ir (Gerste) 大麦, daḡiq (Mehl) 穀粉, zeit (Oliveöl) オリーブ油, hall (Essig) 酢, sīraq (Sesamöl) ごま油, sābūn (Seife) 石鹼, 'asal, rubūb (Honig und Fruchtsäfte) 密および果汁, sukkar abiad wa ahmar (weißer und roter Zucker) 白砂糖, 赤砂糖, fawākih jābisa (trockene Früchte) 乾燥果実, lahm wa šahm (Fleisch

unt Fett) 肉と脂, gubn jābis (trockener Käse) 乾燥チーズ, ḥaṭab, faḥm, tibn (Holz, Kohle, Stroh) 木材, 炭, 藁。

商品の各論的な記述のうち、宝石、香料といった、当時の価値ある貿易商品に詳しく、それにひきかえ、繊維、食料といった部門にあてられている紙数の割合が、相対的に少々少なく、生産財的な性格の金属にもわずかなページ数しかあてられていないが、それは当時のアラビア商人が取扱った商品を、直接に反映したものであって、そのような時代的背景に立てば、おそらく、このような商品構成は妥当なものであったと云えよう。

取扱われている商品は、19世紀以降の「近代」商品学の原料学的な性格を色濃くそなえたものとは異なり、繊維のなかでも、絹子、タビネット、フェルト、じゅうたんといった二次的な加工品から、さらには、雨衣や内装衣といった三次的な縫製品まで含まれていたり、食料の部門でも、果汁、乾燥果実、チーズといった加工品が含まれていることは注目すべきことであって、取引量の多い商品の場合は、その加工度合の高さにこだわらず、最終消費財にまでその記述が及んでいるという点では、むしろ現代の商品学と共通性をもっているとさえいえよう。

記述内容

個別的な商品記述は、全般的にみて簡潔になされているとは云えようが、量的にみて、個々の商品ごとにかかなりの差がみられるとともに、記述内容の重点のおきかたにおいても、それぞれ、著しい特色をもっている。香料や繊維の場合は、大部分の商品はその種類と品質の良否、優劣やその検査方法に記述内容がほとんど限定されている。例えば、「びゃくだん（白檀）には、赤と白との二種があり、赤は薬剤に、白は薬剤と香料に使用される。最良のものは、maqāsiri（黄びゃくだん）であって、その香りと色で識別する。最も劣悪なものは、hawwari（ポプラ種のもの）である。」と記されており、麻の場合は、「その品質は、正しい重さから判る。重いものは麻屑や茎をわずかし含んでいないものである。秤量ができなくても、その気になれば、繊維の品質は、観察によっても識別できる。人は、手触りで検査する。品質の卓越したものほど、しなやかで、やわらかく、光沢がある。劣悪な品質としてみわけられる欠点は、きめの粗さであり、taqmīl（小虫）がついたり、繊維

がさけていたり、茎や麻屑を沢山含んでいるものである。」⁴²⁾と記している。

このように、品種や品質の良し悪し、ならびに、それらを判断する基準や検査方法を中心とした記述は、本書の商品記述のなかで、最も標準的なスタイルといえよう。そして、原著者は、このような品質を、1. 外観の観察によって、イ. 美しい、清純な、新鮮な、潤んだ、といった少々抽象的、観念的な表現で示したり、ロ. 一般的な色の濃淡 (*dichte Farbe*) や、明度 (*hoch*~, *tief*~) や、採度 (*blüte*~) をも区別した個別的なさまざまな色調で示しているほか、ハ. 縞があるとか、穴やこぶがあるとか、丸いかゆがんでいるかといった形状についてもふれている。次いで、2. 手触り、即ち触感による、滑らかなものか、ざらざらしたものか、軟らかいものか堅いものかというような点や、3. 各種の香料の香りや、においといった嗅覚への依存はもちろんのこと、4. 重さの正確な秤量による判断も、商品検査にあたっての重要な手懸りとしてあげている。5. 麻や木綿など繊維のしなやかさといった、弾力性なり伸縮性や、ダイヤモンドの堅牢度といった性能的な面も取りあげているほか、6. ろかいハインド産、りゅうぜん香はオーマン産が良いといったように、品質の良し悪しと産地との関係にもふれている。また、7. 品種のちがいや産地のちがいなどによって異なる商品の呼称、名称についてもふれている。さらに、原著者が、力点をおいて解説をしているのは、8. ネガティブな要素としての夾雑物などの混入などの状態である。そこでは、イ. 成熟や乾燥の度合や、湿気之多寡といった点や、かびや虫食いにおかされたものの有無といった調整の状態、ロ. こしょうの外皮や麻の茎といった商品に付帯した屑の類や、ハ. 土、石、その他の塵の類等の異物に至る夾雑物の有無や多寡といった点もあげられている。

商品の検査、鑑定の方法のうえで注目したいことは、視覚や触覚、場合によっては嗅覚や聴覚にわたる直接的な検査方法だけにとどまらず、やすりをかけてみるとか試金石で検査をしてみるとか焰にかざしてみるといった、簡便な試験による観察から、銀をルツボに入れて熔融してみるとか、金を粉碎し塩と混ぜて陶器のいれもので約20時間も火にかけるといった、かなり手のこんだ化学的な試験方法まで⁴³⁾しるされている。さらに、金、銀といった貴金属をはじめ、ダイヤ、水晶、ガラスといったものの判別に、比重の測定を用いるというように、定量的な方法の適用がみられるのは当然と云えようが、藍につい

ての記述の最後の部分において、「藍を検査し、不純物の量をきめるためには、人は少量を秤って火にかける。藍はもえて上昇してしまうが、粘土や砂のような、それに含まれている不純物は、もえかすの炭として残る。それは、⁴⁴⁾さらにとり出され、秤量され、そこから比例的な割合の数量が決定される。」と述べており、不純物ないしは偽交的な添加物の有無だけでなく、その量的な関係を、定量分析の手法で明らかにすることを述べていることは、注目に値しよう。

「また真珠に対して損傷作用のあるのは、すべての油とあらゆる酸性の物質、とりわけレモン液の如きものであり、また、火による熱や、ざらざらしたものと⁴⁵⁾の摩擦である。」と、その保存上の注意が述べられている部分や、「麝香に対し有害なのは、水と空気である。それ故に、人は、それを注意深く⁴⁶⁾容器に入れ、かつ、蠟ぬりの布地で包んでおかななくてはならない。」として⁴⁶⁾いる部分のように、宝石や香料、金属（さび）などの記述のなかにも、商品の劣化防止、商品保管にかかわる内容が含まれているものがないわけではないが、食料類の記述内容はその品質の良否、優劣よりも、むしろ、その輸送、貯蔵にあたっての商品保管のうえでの留意事項に力点がおかれ、量的にも、その大半の紙数がさかれている。小麦を保存するためには、貯蔵する穀粒の精選と乾燥が配慮されなければならないが、同時に倉庫の選定についてもふれて、「倉庫のあらゆる部分が、乾燥していなければならない。壁も床も、主として床がとくに湿気から自由でなければならない。舗装された床が、とりわけ、この目的に合っている。湿度の高い地方では、穀物類を貯蔵するにあたって、腐敗の進行する危険のない温度に下げよう調整される。そのためには、入口や倉庫に光をとり入れる開口部は、東側に位置しなければならない。何故なら、この方向からは、あらゆる風向の風のうち、湿気を、もっともわずかし⁴⁷⁾か含んでいない風が吹き、腐敗をひきおこす度合がもっとも少ないからである。」と詳しい説明を行なっている。さらに、穀類の貯蔵の際の損害のうちの大半は、ねずみによるものである故、それを防ぐためには、倉庫は、舗装された厚い壁をそなえたものにし、特定の時間、猫をそのなかに入れるとか、ねずみとりを仕掛けたりするほか、殺鼠剤を使用することを述べている。殺鼠剤としてあげている事例は、クリスマスローズ<きんぽうげの茎>や、一酸化鉛、硫化砒素<硫黄と砒素の共融物で

あるかもしれない。>などを粉にすりつぶし、練った穀粉やパンに混入したものであって、このような化学物質が使用されていることは注目すべきことであろう。これらを含めて、商品保管という問題が、穀物をはじめ食料の分野においては当時とくに重要な課題であったことは東欧などにおける、商品学の今日の動向とのかかわりなどからも極めて興味深いことである。

さんごは、生産地においては、 $10\frac{1}{2}$ エジプト Ratl を基準に取引し、それに従って、値付けがされる。その代り、エジプトやシリアやイラクでは、それに仕上げ加工がされている場合は、1,020 Dirham、また、未加工の場合は、1,100 Dirham を単位として支払⁴⁸⁾がされる。」と述べ、麝香の場合にも、「 $10\frac{1}{2}$ mitqāl を単位として取引し、これに対して値付けがされる。⁴⁹⁾」と記されているように、商品の取引単位、なり値付けがされる基準量を記載している事例がある。加工の有無によって取引基準となる単位が異なることをも含め、今日使われている1オンスとか、1ダースといった取引単位の根源を探るうえでも興味ある事例であるが、このような取引基準となる単位数量というのが、商品記述にあたって重要な内容の一つであったことを、改めて確認させるものであると云えよう。

商品の取扱いにあたって知っておかなければならない知識として、価格と品質の両面のあることを総論的な部分で提起しているだけあって、原著者は、商品の各論的な個別的な記述にあたっても、主として宝石類の部分で、標準価格的な基準を、いくつか例示している。真珠について、「durr は宝石に属す。それは lu'lu' <真珠一般をさす> の大きいものであって、それは、あたかも天界における大きな星のようなものである。最良の品種は al qārr であり、それは、すべての側からみて完全に丸い姿をもったものであり、美しい光沢と輝きをそなえた清純な色あいのものである。このような性質をもったそれぞれの宝石は、rath (潤) と呼ばれる。重さが 1 M (1 mitqāl =約4.5g) の、このような真珠の価格は、300 D (dīnal) <デナリ……古代ローマの銀貨……による>、上述の性質をもち、識別ができないほど完全に同じ大きさで、1 M ずつの重さを持つ一対の真珠の場合は、700 D 以上に値する。一対で 1 M の重さのものは、両方で 100 D であり、さらに $\frac{1}{2}$ M の重さのもの一つでは 20 D、 $\frac{1}{3}$ M のものは 5 D⁵⁰⁾ である。」と、その大きさと価格との間の幾何級数的な関係が示されていて興味深い。

このように、個別商品の各論的な記述においては、宝石、香料、繊維、金属、食料といった商品群の内部においては、個々の商品記述の形式や内容に多くの共通性がみられるが、異なる商品群相互の間では、既に引用した事例にみられるように、それぞれかなり異なったユニークな内容を持ち、全体をとおしての叙述様式の統一に留意するよりも、紙数の関係もあってか、むしろ、商品群の性格に対応して、力点のおきかたをかえた叙述様式を採っており、それが本書の特色の一つとなっている。したがって、いな、それ故にこそ、多くの商品学書にみられるような平板な商品記述に陥らずに、アラビア商業の輝かしい繁栄の時代を象徴するような、当時の科学の水準と商人の経験や知恵を集約した躍動感にあふれたダイナミックな叙述となっているのではないだろうか。

<付>

本論文は、昭和50年5月31日、福岡で開催された日本商品学会第26回全国大会における研究報告を骨子として加筆したものである。なお、当初の研究計画が大幅に進捗し、より詳細にわたる内容を報告することができ、かつ予定よりも早く論文にまとめることができたのは、経営学部内規により本年度からともかくも実施されることとなった特別研究制度の適用をうけたことによる成果であることを付記しておく。なお、アラビア語の翻字法はことわりのない限り旧式ではあるが Ritter 文献の方式を採った。

<文献>

- 1) 福田敬太郎「商業学の起源と発達」久保村隆祐・原田俊夫編『商業学を学ぶ』有斐閣(1973), 5頁。
- 2) B. Penndorf, *Die geschichtlich Entwicklung der Handelswissenschaften bis zum Ende des 19. Jahrhunderts. Zur Entwicklung der Betriebswissenschaftslehre*, Festgabe für R. Stern, Berlin/Leipzig/Wien (1925), S.8.
- 3) 増地庸治郎『経営経済学』(経済学全集36)改造社(1929), 9頁。
- 4) 池内信行『経営経済学の本質』同文館(1929), 48~49頁。
- 5) 佐々木吉郎『経営経済学の成立』巖松堂(1930), 74~75頁。
- 6) 平井泰太郎『経営学文献解説』千倉書房(1932), 75頁。
- 7) 荒川祐吉, 「商業および商業学の史的展開」久保村隆祐・荒川祐吉編『商業学——現代流通の理論と政策——』有斐閣(1974), 30頁。
- 8) 柳川昇「商品学の発達——特にその所謂古典時代を中心として——」『東京帝

- 大経済学論集』11—5 (1941), 36—37頁。
- 9) 星宮啓『近代商品学入門』邦光書房 (1969), 15頁, 註 (10)。
 - 10) G. Grundke, *Grundriss der allgemeinen Warenkunde*, Bd I. 3. Aufl. Leipzig (1968), S.18
 - 11) E. Leitherer, *Geschichte der handels-und absatzwirtschaftlichen Literatur*, Köln/Opladen (1961), SS.44—46.
 - 12) 岡下敏「ドイツ会計史の一齣——ドイツ商業学成立の背景」『青山経営論集』8—1/2 (1973), 104—106頁。
 - 13) H. Ritter, “Ein arabisches Handbuch der Handelswissenschaft”, *Der Islam*, 7 (1917), SS. 1—91.
 - 14) E. Wiedemann, *Aufsätze zur arabischen Wissenschaftsgeschichte*, II Bde, Hildesheim/New York (1970), I—SS.853—859, II—SS.5—24 収録の, Beiträge zur Geschichte der Naturwissenschaften, XXX (1912), SS. 229—235 および XXXII (1913), SS.35—54.
 - 15) S. D. Goitein, *A mediterranean society*, California (1967), vol. 1, pp. 149—150.
 - 16) H. Ritter, 前掲13), S.2.
 - 17) E. Wiedemann, 前掲14), I—S.854, II—S.5.
 - 18) 福田敬太郎, 前掲1).
 - 19) H. Ritter, 前掲13), S.2.
 - 20) H. Ritter, 前掲13), S.2. E. Wiedemann 前掲14), I—S.854.
 - 21) H. Ritter, 前掲13), S.3.
 - 22) 同上, S.2.
 - 23) 同上。
 - 24) E. Wiedemann, 前掲14), I—S.854
 - 25) H. Ritter, 前掲13), S.4.
 - 26) B. Penndorf, 前掲2).
 - 27) E. Leitherer, 前掲11), S.45.
 - 28) H. Ritter, 前掲13), S.26, SS.45—46. (本文 2—3 ページ)
 - 29) 同上, SS. 46—47. (本文 3 ページ)
 - 30) 同上, SS.47—50. (本文 4—6 ページ)
 - 31) 同上, SS.53—54. (本文 9—10ページ)
 - 32) 同上, S.54. (本文10ページ)
 - 33) 同上, S.55. (本文11ページ)
 - 34) 同上, SS.55—56. (本文11—12ページ)

- 35) 同上, S.56. (本文12~13ページ)
- 36) 同上, S.56. (本文13ページ)
- 37) 同上, SS. 53~54. (本文 9~10ページ)
- 38) 同上, S.54. (本文10ページ)
- 39) 同上, S.19.
- 40) 同上, SS. 17~18.
- 41) E. Wiedemann, 前掲14) II-S. 10.
- 42) 同上, II—S.15.
- 43) 同上, II—SS.6~7.
- 44) 同上, II—S.12.
- 45) 同上, I—S.856.
- 46) 同上, II—S.9.
- 47) 同上, II—S.18.
- 48) 同上, I—S.858.
- 49) 同上, II—S.9.
- 50) 同上, I—SS.855~856.